

第五章

『関係性の質を高める』

～人間関係をより良くしたい、組織としての相乗効果を高めたいと感じているあなたへ～



今月ご紹介する言葉は、

『随人観美（ずいじんかんび）』

という言葉です。

人は長所と短所を併せ持っている。欠点だらけに見える人でも、必ず美点がある。「随人観美」、つまり人に随(したが)って美を観ずるとは、その人でなければ持っていない美しいもの＝強みを見つけていこうという意味の言葉です。

私はこの言葉が好き...というより、こういう見方が自然にできる人になりたいと願っています。

職業柄、話し合うテーマが、「問題点」「不足点」を明確にして、その改善策を設計するというものが多いということもあり、ついつい「悪い部分」に意識が向きがちなのですが、この状態にどっぷりつかってしまうと、実は大きなマイナスがあることに気づかされてきました。

主なマイナス点は、

- ・そもそもネガティブなアプローチであるため、発想が限定的になってしまうことが多い
 - ・改善活動実施中、「ねばならない」活動となり、メンタル的に追い込まれることが多い（楽しくない、ワクワクしない、疲れてしまう・・・）
 - ・このアプローチで成果が出たとしても、達成感や感動よりも、安堵感や解放感を感じがち
 - ・不足点の補強や弱みの克服の場合、「標準」や「均一化」を目指すことになることが多く、大きな飛躍や想定以上の成果を得られることが少ない
 - ・そもそも自分が苦手なことの改善の場合は、途中で挫折してしまう確率が高い
- といったものでした。

「強みの上に築け（Build on strength）」とP・F・ドラッガーも言っている通り、やはり人は「自らの強み」を知り、それを磨き、行動することこそ、大きな成果を創出するために本質的に大切なことなのでしょう。

さてどうでしょう...、皆さんは、ご自身の強みが何であるか自覚していますでしょうか？そして、今、それらを発揮できていますか？

皆さんが所属している組織は、互いの強みを認識し合い、その強みが如何なく発揮されるような環境になっていますでしょうか？

日本は「問題解決、改善の民族」と言われる通り、足りないものを自覚して、それらを愚直にコツコツ補っていくという文化というか特性を持っている気がします。このこと自体、私は非常に素晴らしいことだと感じますので、単純にこれに加え、自らの「美点(強み)」を認めて伸ばすという活動(文化)もプラスしていったら良いと思います。

特に、組織を率いる影響力の高い立場にいらっしゃる皆様には、役割分担、人財育成、コミュニケーションといった場面で、ご自身が「随人観美」のスタンスで考え、発言し、行動を起こせているか どうか、確認いただければ幸いです。

「不信、不安、不満」を出せと言われれば山ほど出てきそうな今の世情ではありますが、そういう 状況であるからこそ、私自身、「随人観美」を念頭においた行動を心がけていこうと思います。

日本の今を、そして将来を明るく照らしていくために。

＜荻生徂徠の人を育てる要諦九訓＞

一、人の長所を始めより知らんと求べからず。

人を用いて始めて長所の現るるものなり。

二、人はその長所のみを取らば即ち可なり。短所を知るを要せず。

三、己が好みに合う者のみを用いる勿れ。

四、小過を咎むる要なし。ただ事を大切になさば可なり。

五、用いる上は、その事を十分に委ねるべし。

六、上にある者、下の者と才知を争うべからず。

七、人材は必ず一癖あるものなり。器才なるが故なり。

癖を捨ててるべからず。

八、かくして、良く用いれば事に適し、時に応ずるほどの人物は必ずこれあり。

九、小事を気にせず、流れる雲のごとし。

※荻生徂徠

日本の儒学を、中国の呪縛から解き放った大思想家。儒学者。

柳沢吉保に仕え、五代将軍綱吉の学問相手を勤めた。古文辞学を提唱し、門下に太宰春台・服部南郭らの後才を育てた。徂徠の登場は、日本儒学の独自性確立と学問と政治の分離を促す一大転換点となった。著書に『政談』『弁道』など多数。

「一期」とは、仏教用語で人が生まれて死ぬまでを意味する。つまり「一生」

「一会」とは、集まりや会合を意味する。つまり「一度の出会い」
日々の生活の中で、人や出来事に幾度となく「出会う」が、その「出会い」は実は、その時一度だけ。二度と同じ機会は戻ってこない。そうであるならば、「会ったとき」が「別れのとき」
そのような心持で、「一度きりの出会い」を大切にし、誠心誠意受け止めることこそ本当の意味で今を生き、人生を豊かにしていく秘訣である。

振り返ってみれば、私のこれまでの人生に大きな影響を与えたのは「人との出会い」でした。学生時代、心ある素晴らしい先生に数多く恵まれ、大きな示唆と優しさをいただきました。叱られることが多かったけれど、その度に、「思いやりとは何か」「一所懸命に取り組むことの価値」「リーダー（引っ張る立場）の立ち振る舞い」などを考える機会をいただきました。

一生付き合っていきたいと思う素晴らしい友もできました。勉強はそこそこに、馬鹿ばかりしていましたが、妙な打算はなく心から楽しみ、笑って、時にはケンカして・・・かけがえのない時間を過ごすことができました。

就職して、最初の会社で一番面倒を見てくれた上司は、43歳の若さでこの世を去りました。ガンに侵されていたことに気づかなかった私は、最後までその上司に「自分の言いたいこと」ばかり伝えていました。しかし、彼は終始笑顔で話を聴いてくれ、「石月なら、大丈夫だよ」と言葉をかけてくれました。上司の死が本当に突然やってきて、私は自分を恥じましたが、同時に上司が実践してくれた「徹底した傾聴」「信じる姿勢」を自分も実践していこうと心に誓いました。

転職してコンサルタントとしての道を歩み始めて半年後、仕事が上手いかず「鬱状態」になり、逃げ出そうとした時も、「焦らずゆっくりでいいよ。少しずつ、確実に力をつけていこう」と当時の上司や周囲のメンバーから励まされ、何とか踏みとどまることができました。あの時、会社を辞めて「逃げる」選択をしていたなら、間違いなく今の私はありません。自分の力で「苦境」を乗り越える経験をさせていただけたことで、仕事に対して自信を持つことができ、成果も出すことができました。

その後、リーダーやマネージャーという立場になってからは、お客様に仕事を通じて育てていただく機会を数多く頂戴し、縁あってチームメンバーとなった仲間とは、真剣なぶつかりあいを通じ、自分が至らない部分など、多くのことを気づかせていただきました。そして、ここでも「生涯の友」「師」と呼べる人たちと出会うことができました。ここ1～2年は、いろいろな分野で活躍する方を紹介いただく機会に恵まれ、その方々から新たな「示唆」と素晴らしい「成長の機会」を頂戴しています。

思い起こせば、まだまだ沢山の「出会い」が...

本当に私は支えられている、「生かされている」のだと心から感じます。

だからこそ、そのかけがえのない方々との「出会い」を私は本当に大切にしているだろうか、誠心誠意、相対することができているだろうか...という思いも込み上げるのです。

あなたにめぐり逢えて ほんとうによかった 生きていてよかった
生かされてきてよかった あなたにめぐり逢えたから
つまづいてもいい ころんでもいい これから先
どんなことがあってもいい あなたにめぐり逢えたから
ひとりでもいい ころから そういつて くれる人が あれば。

— 相田みつを（日本・詩人、書家）

「一期一会」

皆さんは、これまでどんな「出会い」がありましたか？ 自分にどんな影響がありましたか？

その「出会い」を、「縁」を、誠心誠意、大切にしてくださいでしょうか？

そして、これから...どんな「出会い」をしていきたいですか？

＜素晴らしい「出会い」を引き寄せる 5つのポイント＞

1. 自分の内面を磨く

一番はやはり自分が「魅力的な人」になること。話をしてみたいと思える人になること

2. 傾聴する力を身につける

傾聴できる人には、自然と情報や人が集まってくる

3. 自らプラスの人となる

前向きに物事を捉える、良い点に気づける人の周りには人を引き寄せるエネルギーがある

4. 交流は、少なく深く

出会いを大事にしようと思えば、数多くではなく、少なくとも深くが大切

5. 最初の一步は、まず自分から

出会いの最初の一步はまず自分から。大げさに考えず、軽い気持ちで即行動を

「克己」とは、論語の〈子（し）曰（いわく）、克己復礼を仁となす〉にもとづく言葉。

弱い自分、甘い自分に打ち勝つ意味。仕事における「克己心」とは、客観的な視点で己の仕事を厳しく評価しつつ、決して自分を否定するのではなく、自分の力を信じて心身とスキルを磨き続ける姿勢と解釈できる。

「励まし」とは、気持ちが奮いたつようにしてやる、元気づける、力づけること。

「克己心」を持って、常に自分を磨き続ける努力があるからこそ、素晴らしい仕事、大きな成果が生まれる。しかし、自分ひとりで「克己心」を維持していくことは難しい。

周囲からの「励まし」がいる。「励まし」によって、諦めたくなる弱い自分に立ち向かう勇気が湧いてくる。心が奮い立つ。

「克己心」ある活動と「励まし」の連鎖。

—これこそ仕事に本気と情熱をもたらす秘訣ではないだろうか。

冒頭でご紹介したのは、今月5日にお亡くなりになった中村勘三郎さんの言葉です。強い克己心をもって芸を磨き続け、常に観客への感謝を忘れず精進する立ち居振る舞い…。多くの感動を与えてくださった真のプロフェッショナルのあまりにも早すぎる死が悔やまれます。

振り返ってみれば、仕事において達成感や充実感、成長感を感じることができた時とは、「克己心」を持って逃げずにやりきれた時であったと感じます。

初めてコンサルティング案件のプロジェクトリーダーを任された経験—不慣れで連日徹夜状態でフラフラでしたが、クライアントの社長と本気でやり合い、最終的に成果が出始めていると褒められた瞬間は、涙が出るほど嬉しかった。

組織をマネジメントする立場になり、メンバーとチームのビジョンを真剣に語り合った経験—耳の痛い話も含めて言いたいことを言い合い、曖昧な妥協はせず、全員で明確なビジョンをつくり込めたとき、深い達成感と何としても形にしたいという想い(勇気)がみなぎってきた。

・・・などなど。このような貴重な経験一つひとつが、今の「私」と「仕事」の源となっているのです。

そして、苦しい状況で諦めそうになったとき、倒れ込みそうになったとき、支えてくれたのは仕事の仲間、上司、友人、お客様でした。「石月ならできる！大丈夫！」という「励ましの言葉」と深い「愛情」があったからこそ、苦難を「かけがえのない経験」とすることができたのです。

私が今あるのは、このような方々のおかげ。本当に、心から感謝しています。

たとえ確証がなかったとしても相手を信じて「励ます」～それが「克己心」ある勇氣ある言動につながり、成果を生む～その成果は周囲の人たちの役に立ち、周囲の人たちは更に期待と励ましの言葉を送る・・・こんな「つながり」を現場にたくさんつくれたなら、きっと素晴らしい社会になるだろう。

2012年ももうあと僅か・・・

皆さんは今年、自分を信じて「克己心」を持った言動と体験をできたでしょうか？
誰かを「励まし」、一歩踏み出す勇氣を与えることができたでしょうか？

<一歩踏み出す勇氣を与えてくれる5つの『励ましフレーズ』>

1. 「●●さんのおかげで●●が上手くいきました。ありがとう」
2. 「大丈夫、きっと上手くいくよ。●●さんなら、できる！」
3. 「あなたと一緒に仕事できて本当によかった。これからも宜しく願いします」
4. 「仮に上手くいかなかったとしても、挑戦したあなたは本当に素晴らしいと思う（挑戦したあなたを誇りに思う）」
5. 「●●さんと一緒にいると、楽しい。元気がでます。安心します」

「愛縁機縁」—仏教用語。不思議なめぐり合わせ、縁の奇跡を伝えた言葉。

「愛縁」とは、恩愛から起こる人と人の結びつきの意。

「機縁」とは、ある物事が起こったり、ある状態になったりする、きっかけの意。

人と人とが運命的に出逢い、互いに気心が合うかどうか・・・。

それは、みな「縁」という不思議な力によるものであるということ。

毎日を充実して生きている人、やりたいことをやり続けている人、
幸せを実感している人・・・、こんな人たちに共通していることは、
不思議な「縁」を体感し、それに深い意味を感じ、心から感謝していること
である。

人として生まれ、70億を超える人が地球上に存在する中で、たまたまめぐり
逢い、時を共にしている—まさに奇跡。この「奇跡」は日頃、あなたのそば
で起きている。

あとはその「奇跡」をどう捉え、どうしていきたいかにかかっているのだ。

皆さんにはどんな素敵な出逢いがありましたでしょうか？

そして、その運命的な出逢いからどのような影響を受けてきたでしょうか？

改めて振り返ると、私のこれまでの人生、「愛縁」を感じずにはられません。

今の私があるのは、間違いなく、素晴らしい「縁」のおかげです。

特に、大きな選択の場面では、いつも素晴らしい出逢いがありました。

26歳で転職を決意する直前には、同期の友人からの叱咤とある経営者との出逢いがありました。

新たな会社で半年したころ、苦境に追い込まれて辞めようと弱気になったとき、踏みとどまって頑張れたのは上司・先輩の親身な対応でした。

自分が教育事業を志そうと腹をくくれたのは、友人とお客様からの強い承認と勇気付けでした。

そして今、厳しい環境下であっても前向きに仕事に打ち込める環境にあるのは、間違いなくこれまでの素晴らしい出逢いのおかげです。

自分はこの素晴らしい「縁」に応える行動ができているだろうか？

支えられてきた自分は、少しでも誰かを支えられる存在になれているだろうか？

本当にまだまだ不十分ではありますが、精一杯、真摯に取り組んでいこう・・・。

新緑の季節、そう決意を新たにしました。

『人との縁・つながりは大切なもの。
縁あることを喜び、誠意と熱意でお互いのつながりをより強めたい。』

— 松下幸之助（日本・実業家、現Panasonic創業者）

『小才は、縁に出合って縁に気づかず
中才は、縁に気づいて縁を生かさず
大才は、袖すり合った縁をも生かす』

— 柳生家家訓

「愛縁機縁」—

本当の意味で「出逢い」を大切にしてくれよう。それはきっと自分の人生に必要で起きたものだから。

出逢った相手の言葉に、行動に、素直に心を向けていこう。そこにこそ、大きな学びがあるから。

皆さんは、「縁」に気づき、そして生かすことができますか？

＜素敵な“縁”に恵まれるために意識したいこと＞

1. 自分をよく見せようという思いを捨てる
2. いただいたアドバイスには素直に耳を傾け、心に向ける
3. 物事に取り組む際には、真摯に懸命に取り組む
4. 自分の得意分野を持ち、強みを伸ばす
5. 心からの「ありがとう」を忘れない

竹に上下の節あり

2013.11

禅の言葉「松無古今色 竹有上下節」に基づく格言。

—「松に古今の色なし、竹に上下の節あり」

松には古い葉や、新しい葉があるけれど、季節は移ろえど「松の緑」は変わらない。

竹にはハッキリとした上下の節があって上下の区別がつけられる。

世の中には、生命や人としての思いやりといった本質的に平等で変わらない価値観（＝松の緑のように普遍）がある一方で、誰もが同じではなくそれぞれに個性があり、境遇も役割にも違いがある（＝竹のように区別が明確）。家庭では親子男女の違い、組織には上下の関係、社会には貧富の差が存在する。実は、全てが平等で同じ状態になるよりも、むしろ「違い」「区別」があった方が調和を保てるものである、という教え。

これからは「多様性」の時代。様々な価値観に簡単にアクセスできる社会。均一化や標準化、平等や公平性を求めすぎると逆に混乱を招いてしまうのではないだろうか。

目指すゴールが一緒なら、それぞれの個性や独自性を均一化するのではなく、「受容し、活かす」という発想がより大きな成果と全体的な調和を生み出すのだ—。

今、あなたは、あなたの組織は「真の調和」を生み出せているだろうか。

「竹に上下の節あり」—最近知った言葉なのですが、調べてみると非常に深みのある言葉だと感じたので紹介してみました。ここ2～3年、企業の若手社員向けの教育研修で感じるのは、「普通がいい、無難でいい」というエネルギーです。ネガティブだとか、能力が足りないではなく、むしろ前向きで頑張り屋で頭の回転も早いメンバーが多いと感じるのに、「印象に残るメンバー」「個性的だと感じるメンバー」の割合が少ないのです。私の感性が鈍ってきてる・・・という可能性も否定できませんが、友人に聴いても同様の印象との回答が多いので、この傾向はあながち間違いでないと思います。

彼ら、彼女らに「個性」「ユニークさ」は必ずあるはずです。しかし、育ってきた環境・時代背景・人間関係等が原因となって、自分の個性や自我を出せない状態（恐れがある状態）にあるのでしょうか。

個性を出せない状態は、常識や一般論、最適解を求める方向に向かいがちです。しかし、机上では最適解が見つかったとしても、実際のビジネスの現場では「一定の正解はない」が当たり前。一般論や最適解ばかりを求めてしまうメンバーは、現場で戸惑い、苦しんでしまうようです。

これから益々加速してゆく「多様性」—答えは教えてもらうものではなく、「自ら考え、探し、時には創っていくもの」という自立性、独自性が更に重要となるでしょう。同じようなモノの見方・考え方・行動ではなく、多様なモノの見方・言動を受容し、活かし、相乗効果を発揮できる環境（組織）を意識して創っていきたいですね。

節がある(違いが明確)からこそ竹はしなやかで、厳しい風雪にも耐える強さがある—人も組織も、きっとそうなのだと感じませんか？

『多様性は活力であり進歩の源である。企業は社会や消費者に
「それまでに存在しなかった価値」を提案できなくなったら、
組織として機能しなくなる。』

—ルチアーノ・ベネトン（ベネトン創業者）

『本当に人のことを思う人は、「私が私」で生きている。「私が私」で
生きているから、人が人であることを大切にしたいくなるのである。』

—行徳哲男（哲学者・日本BE研究所設立者）

「竹に上下の節あり」—

お互いの違いを大切にしよう。違和感こそ新たな何かを生み出すきっかけと捉えよう。共通の目的やビジョンが持てたなら、お互いに個性、独自性をどんどんぶつけ合おう。めまぐるしく変化する環境の中では、想定しきれない問題・障害が常にやってくる。その対処には、画一性ではなく多様性こそ大きな武器となるのだから。あなたの「自分らしさ」ってなんですか？ もっと出してみませんか？

＜自分の“独自性”“らしさ”を探すための3つの質問＞

1. どんな考え方(価値観)の人、職場環境だと自然体で活動できますか？
2. 夢中になってしまうコトは何ですか？それには、どんな特徴があるのでしょうか？
3. 人と話をしていて「違和感」を感じるのはどんな時？どんなコト？

“忠恕”とは、「真心からのおもいやり」—「論語・夫子の道は忠恕のみ」より

“おもてなし”とは、「裏表ない心で見返りを求めない出迎え、応対」

“忠”とは自分の偽りない気持ちや心を尽くす「まごころ」のこと。

“恕”は自分の心を他者に推して「思いやる」こと。

忠恕の心をもって、相手をもてなすことができたなら、その人との関係はかけがえのない素晴らしいものとなるはずだ。

素直に裏表のない心で相手を迎え、話をよく聴き、その心情を共に感じ、優しくかつ真剣に応対する—。このような立ち居振る舞いは相手に感動を与え、結果、相手のあなたに対する言動も大きく変わっていくはず。

私たち一人ひとりが、この「忠恕とおもてなし」をもっと意識して行動したい。

真の感動とは、モノやサービス、事象そのものにあるのではなく、その根底にある忠恕の心やおもてなしによって生み出されるのだから。

あなたは、大切な人に対して、今の仕事に対して、「忠恕とおもてなし」を実践できているだろうか。

「忠恕とおもてなし」—私の職業人生において、今尚、深く心に刻まれている言葉です。新卒入社したシティホテルでの5年間は、これを徹底的に体感する期間となりました。しかしながら、意識して実践しようとするほど真の「忠恕」とは、「おもてなし（ホスピタリティ）」とは何かが余計に分からなくなり、その深さと難しさ痛感したものです。当たり前ですが、マニュアルを超えた領域での活動なので、正解は存在せず、常にお客様からの反応が全てです。形だけの礼を尽くしても(表面だけ笑顔、立ち居振る舞いだけ美しいなど)わざとらしく不自然な対応に、相手の期待に応えようとするほど振り回されて空回り...という毎日。正直辛く苦しいことも多かったのですが、この経験は多様な「考え方や感じ方」に触れることができ、真の「おもてなし」の難しさを学ばせていただく大変貴重な機会でした。

そして、本当の意味で「忠恕とおもてなし」を実践するには、まず自分自身を大切に
する、自分の気持ちに向き合って受容することが必要ではないかと感じています。自分を
押し殺して無理して行う行為は、どこか不自然で相手に見返りを求めてしまう「表面的
サービス」となってしまうからです。

自分の想いを大切にすることこそ、相手の想いも大切にでき、そして相手が気づかない
部分まで気づき、期待を大きく超えた対応が自然に実践できる……。私自身もまだま
だ出来ていませんが、一步ずつ深め、近づいていこうと思います。

直接的に目に見える品質の差が殆どない時代。表面的な「つながり」ならすぐに持てて
しまう時代。

真のパートナー的関係を構築していくためには、「忠恕とおもてなし」こそキーとなる
はずだから。

『みせかけの微笑みを見せたり、心に仮面をかぶったりしない真心の
こもった、裸のままの親切には、人は決して抵抗できないものだ。』

—マルクス・アウレリウス（ローマ皇帝）

「忠恕とおもてなし」—

古くから日本人の文化的な特徴といわれる心情、立ち居振る舞い。

自分の仕事を確認してみよう。大切な人との関係を見つめ直してみよう。

そこに真の「忠恕」があるか、「おもてなし」があるか。

今後、日本が誇りをもって世界に発信し、リードしていきたいキーワード。

まずは自分自身を大切にすることから。そして、「忠恕」と「おもてなし」の実践を意
識していこう。

＜“おもてなし”の実践に向けて心がけたい3つの基本行動＞

1. 心のこもった挨拶

…心を込めた「こんにちは」の後に、相手を気遣う一言を添えてみよう

2. 「ゆとり」の環境づくり

…時間は前後に余裕を持たせて。心が安らぐ整理清潔な環境づくりをしよう

3. 自分の「想い」や「感情」を受け止める

…「喜び」「怒り」「悲しみ」など心の声に耳を傾ける。無理して頑張りす
ぎない

出典は、中国古典『淮南子』。

「この世の中に、膠（にかわ）と漆（うるし）ほど憎み合っているものはなく、氷と炭ほど愛し合っているものはない。なぜなら、膠と漆は、一度くっつくと合体して、お互いに自分のもとの姿を失ってしまうが、氷と炭とは、氷は炭火を消して炭の形をとどめ、炭火は氷を溶かしてもとの水にし、お互いにもとの形を保つのだ」

氷と炭は確かに性質を異にしている。「氷炭相容れず」という言葉があるように、互いに反目し合う、互いに足を引っ張り合うという見方が多勢かもしれない。

しかし、両者が互いに作用しあった結果、両者それぞれが、己の本来の姿に立ち戻れるという「氷炭相愛す」という見方の方がより深みがあると感じないだろうか。

自分の本質を気づかせてくれる存在とは、実は自分と性質を異にしている人。もし、その性質の違うもの同士が「共通の目的」を持って進むことができたなら、その可能性は大きく広がっていく・・・とも考えられないだろうか。

「この人とは合わないな、考え方・やり方が違うな」というような違和感を感じたこと、皆さんもこれまでたくさんあったのではないのでしょうか？

その後、どんな行動を取りましたか？多くの場合、その人とは距離を置き、結果として疎遠になってしまったのではないのでしょうか。何か事を進める時、確かに「同じ価値観、考え方、やり方」を持った人たちと一緒にであれば、居心地も効率も良く進めることができるでしょう。互いのコミュニケーションもスムーズで、信頼関係もスピーディーに築いていくことが出来ると思います。

基本的に「同質な人」と共に歩むことは、プラス面が多いので素晴らしいことであると思うのですが、一方で、同質なものの以外を受け取る(フィードバック)機会が減ることで、「モノの見方・考え方が偏る」「気づき、成長の機会を失う」「違った発想やアイデアが生まれにくい」「問題や障害に対する対応力が低下する」といったマイナス面もあるのでは...と感じています。

私はどちらかというと普通に意識せずにいると、「氷炭相容れず」的、同質の人とばかり付き合う傾向が強いと自覚しています。せっかく出逢っても「異質な人」を自分から遠ざけてしまうのです。しかし、自分のキャリア構築という視点で改めて振り返ると、

自分に大きな「気づきと成長」をもたらしてくれたのは、「異質な人」との関わり(その多くが厳しい指摘を受けたり、対応に苦慮した体験ですが...)にこそあったことに気づかされます。考え方や動き方が全く違う部下の育成、見る角度・見えている景色が違う同僚からのストレートな指摘、判断基準が違う上司との軋轢...など、その時に必死になって対応した経験からの学びは、「自分の本質」を明確に認識させてくれると同時に、「新たな視点」をプレゼントしてくれました。

「異質な人」との関わり—今では意識的にその機会を持つように心がけています。

『世界には、これ以上の均質性はいらない』

— P.E.ドラッカー (オーストリア 経営学者・コンサルタント)

『足並みの合わぬ人を咎めてはならない。彼はあなたが聞いているよりもっと見事なリズムの太鼓に足並みを合わせているのかも知れない』

— ヘンリー・ソロー (アメリカ 作家・思想家)

「氷炭相愛す」—

自分とは違ったモノの見方、価値観、判断基準に出会ったのなら、それを歓迎しよう。それはきっと自分が見えていないもの、気づいていないことをプレゼントしてくれるものだから。

表面的に繕われた鎧を取り去り、「本来の自分」を取り戻し、より輝かせてくれるかも知れないから。

大きな気づきと成長は、多様性の中で「選択」していくことにこそある。

＜"異質"に出会ったときに自分に投げかけたい3つの質問＞

1. その「違い」はあなたにどのような示唆、学びをもたらしますか？
2. あなたが本当に大切にしたいと覚えることは何なののでしょうか？
3. その「違い」と共存共栄していく方法はありませんか？

「君子和而不同。小人同而不和（論語）」を語源とする言葉—「和して同ぜず」。

君子は人とよく調和してやっていくが、自分の立場（考え方）を忘れて人にこびへつらったりはしない。器量の小さい人間は、すぐ他人に表面的な同調を示したり、流されたりするが、心から調和してやっていくことはない。「和」とは、主体性を保ちつつ、他者と心からとけ合う状態を意味する。

「同」とは、自分の考えが無いまま、気まぐれや利害関係などで他人と同調するうわべだけのつき合いを指す。

人との関わりの中で生かされている私たちにとって、「和而不同」の関係性を周囲と築いていくことこそ、きっと幸福な人生なのだろう。まずは自分が「主体」となる（=自分の軸を明確にする）こと。そして、相手の「主体」も尊重し、共に調和して生きていくこと。そんな「和而不同」の関係を、少しずつでも増やしていこう。

皆さんは、「和而不同」のような関係性を築けている人がどのくらいいるでしょうか？

今、仕事で関わる人たちとはどんな関係を築いていますか？

実はこの言葉、私にとっては非常に耳の痛い、昔から課題として認識しているメッセージです。

子供のころの私は、色々な面で自信がなく、周囲からどう見られているかを過剰に気にする子でした。従って、周りの多勢な意見に調子に合わせる、対立は極力避ける、厳しい状況になると笑って誤魔化す、友達からの誘いは嫌でも断れない...といった情けないお調子者だった気がします。

その影響もあってか、高校・大学・ホテル就業時代も周囲と上手に合わせる表面的な対応を（無意識のうちに）してしまうことが多く、周囲から「本当にそう思ってるのか？」「なんか軽い」「適当に答えるな」などの指摘を受け、悪い状況・気まずい雰囲気になってしまうことも少なくありませんでした。

コンサルティング会社に転職後、有難いことに、周囲からストレートな指摘を継続して頂く機会に恵まれたこと、ありのままの私を受け入れてくれる素晴らしい友人たち、上司・同僚に出逢えたことで、徐々にではありますが自分の課題と向き合い、「主体—自分の考えを明確にし、それを軸に行動する。人と比較するのをやめて互いの違いを認め、尊重する」が身に付いてきたように感じます。

そして今、そのおかげで確実に「和而不同」の関係が増えていることを実感しています。

『それは夢にすぎないだろうか。
ただお互い、同じ国に生きる人間として、素直に心と心を寄せ合い
手と手を握り合って、この国、日本の繁栄と平和と幸福を
ひとすじに探し求めることができないだろうか。
真剣になれば、意見の対立もおきるに違いない。
だが、私たち日本人としての願いが一つなら、かならず
そこに高い調和と力が生まれよう。それは、決して夢ではないはずだ』
— 松下幸之助（日本・実業家、現Panasonic創業者）

「和而不同」—

今こそ、自分と、周囲と真剣に向き合い、本当の信頼関係を築いていくと誓おう。
打算的な対応、表面的な馴れ合いからは、本当の価値は生まれない。
一度きりの人生、戻らない大切な時間だからこそ、「主体」となって生きよう。
互いに「主体」者であれば、互いを大切に想い、自然体で充実した時を共有できるはず。
「和而不同」で強い絆を、そして、素晴らしい未来を一緒に創っていこう。

＜真の信頼関係を築くために身につけたい3つの習慣＞

1. 自分の心に耳を傾ける、素直になる
2. 相手の言葉の奥にある「真意」に意識を向ける
3. 「妥協」や「トレードオフ」を超えた「第三案」を探す

君は君、我は我也、されど仲良き

2014.10

日本の小説家・劇作家である武者小路実篤(明治18年～昭和51年)の言葉。

あなたはあなたであり、私は私。お互い、考え方や好み、そして歩む人生も違う。

お互いの「違い」を認め、尊重する姿勢から「されど中良き」関係性は築かれる。

山あり谷ありなのが人生。それぞれがそれぞれの道を歩みつつ、互いに助け合えるような深い絆を周囲の人と創ることの大切さを説いた言葉。

人は知らず知らずのうちに傲慢な態度になってしまうことがある。考え方や価値観の違う人とやり取りする中で、相手に否定的な態度を示してしまったり、自分の価値観ややり方を押し付けてしまっていることがある。自分が完璧でないことは十分に分かっているはずなのに・・・。

自分の価値観や人生を大切にしているのなら、やはり相手のそれも大切にしたい。「違い」を理解し、尊重する勇気を持とう。さらに、そこから互いに学んでいこう。

これから出逢う人たちとこんな姿勢で向き合えたのなら、深い絆、大きな可能性、そして自身の成長(変化)を得ることができるのではないだろうか。

皆さんには、「自分とは価値観も生き方も大きく違うが、とても仲の良い友人」がいますか？

先般、関西方面へ仕事で出張した際、私は上記のような友人と食事する機会を持ちました。ホテルに勤めていた時代の同期で、私とは多くの部分で違った考え方、価値観を持っている、性質の異なる男です。臆することなくストレートに自分の考えを口にし(時に攻撃的)、思い立ったら即行動、一般的に考えたらリスクーと思える決断をどんどんしていく(...と私には見えます。本人はそうかあ？という反応)、純粹で自分に正直、子供っぽい部分も持ち合わせています。一緒にいて話をしていると、「そこまで言うか！」というレベルの指摘も多いので、正直ムッとすることも多いのですが、気づけば18年の付き合いで、ホテル時代の同期では一番定期的に逢っている友人です。

ムツとすることも少なくないのに何故逢うのか。掘り下げて考えてみれば、自分と「違うもの」を持っているからこそなのだと気づかされます。彼との時間は、楽しいだけでなく、刺激があり、今の自分の内面や立ち位置を明確にしてくれる存在なのだと思います。彼だけでなく、私の友人は「自分とは異質の人」が少なくありません。そして、そんな環境に改めて感謝すると共に、彼・彼女たちにとってみれば「異質の存在」たる私が、良い刺激と気づきを与えられる存在になっていきたい—そう強く想いました。

『もし君が悩む友を持っているなら、
君は彼の悩みに対して安息の場所となれ。
だが、いうならば、堅い寝床、戦陣用の寝床となれ。
そうであってこそ君は彼に最も役立つものとなるだろう。』
— フリードリヒ・ニーチェ（ドイツ・哲学者）

『自分の価値観で人を責めない。一つの失敗で全て否定しない。
長所を見て短所を見ない。心を見て結果を見ない。
そうすれば人は必ず集まってくる。』
— 吉田松陰（幕末の長州藩士、思想家、教育者）

「君は君、我は我也、されど仲良き」—
信念を持ち、自分だけの道を懸命に、ひたむきに、大切に歩んでゆく。
そんな生き方を自分がしたいのなら、他者の「道」も大切にしたい。
この世界は多様性があるから面白い。自然の美しさも草花に様々な種があればこそだ。
強いチームは「異なる強み」を持つものが一体となることで創られる。
真に「深い絆」を築き、共生し、未来を更に充実したものとしていくために、
周囲との関わり方を、今一度見直してみよう。

＜"多様性の時代" に身につけたい3つの姿勢＞

1. 相手の話に耳を傾け、まずは理解することから始める
2. 異なる意見や価値観を持つ人と逢う機会を主体的に持つ
3. 素直に自分の「強み」「弱み」を受け入れる勇気を持つ

陽明学者で思想家、安岡正篤の言葉「縁尋機妙、多逢聖因」より。

縁尋機妙（えんじんきみょう）とは、「良い縁がさらに良い縁を尋ねて発展してゆく様は誠に妙なるものがある」という意味。

多逢聖因とは、「いい人・コト・機会・モノに交わっていると良い結果に恵まれる」という意味。

まず自ら「いい人」に逢いにいくこと、「運氣が良い」と感じる場所に向くこと（するとチャンスに巡り合える）。そして、良書を読むこと。これが良い結果を生み出す要諦である—という教え。

前向きで行動力のある人と一緒にいるとこちらもやる気が湧いてくる。ぐんぐん成長している勢いある組織に所属していると自分の成長スピードも早くなる。今年を過去最良の一年とするために、自分が関わる人・コト・場所・モノについて心に向けて吟味してみよう。自分だけでなく、共に生きる大切な人たちのためにも。

皆さんは今年、どんな人と多くの時間を分かち合いたいですか？どんなコトにチャレンジし、どんな場所に足を運ぼうと思っているのでしょうか？どうせなら自分の「運氣」が高まる、エネルギーが湧きでるような人との交わり、チャレンジ、場所、モノを選択してはどうでしょう。

私は特に信心深いということはないのですが、確かに良い「運氣」をもらえる人やコト、モノはあると感じます。一緒にいると元気・勇気が湧いてくる人とどっと疲れが出てしまう人、取り組むほど良い結果が生まれていくコトと悪い方向に流れてしまうコト、持っているだけで幸せな気分になるモノなど、感覚的ではありますが、それは確かに存在すると思います。

そういう意味では私は幸運で、特に2010年に独立してからの4年半はとても素敵な「出逢い」「コト」に恵まれ（もちろん辛く悲しい出来事もありましたが）、総じてプラスのエネルギーに満たされる時間が多かったと感じています。本当に感謝、感謝です！

人生は選択の連続、そして、決して戻らないかけがえのない「時」でもあります。だからこそ、自分がプラスのエネルギーに満たされる人・コト・場所・モノとの出逢いを意識して選択することが大切なのではないでしょうか。皆さまに良い「運氣」が訪れる一年になることを、切に願っています。

『あなたがそこにただいるだけで、その場の空気が明るくなる。
あなたがそこにただいるだけで、みんなの心がやすらぐ。
そんなあなたに私もなりたい。』
— 相田みつを（日本・詩人、書家）

『交わってためになる友を近づけ、損になる友を遠ざけ、かりそめにも己
にへつらう者を友としてはならない。』
— 渋沢 栄一（日本 実業家・日本資本主義の父）

「多逢聖因」—

今、あなたは「やる気」「勇氣」がみなぎっている状態にあるだろうか。
もしその状態にないのなら、人との交わりや取り組んでいることを見直す必要があるかもしれない。
あなたのレンズは何にフォーカスしているだろう。失敗のリスクか、それとも成功の可能性か。エネルギーは共振、拡大していくもの。プラスは更にプラスに、マイナスは更にマイナスに。
どちらに転んでも一度きりの人生、どうせならプラスのエネルギーを選択したい。
あなたがプラスのエネルギーに満たされたなら、あなた自身が周囲の人やあなたの居場所を、明るく暖かくする存在となれるはずだから。さあ、この瞬間から「いい選択」をしていこう。

<成長と成果をもたらす「出逢い」を探すための3つの問いかけ>

1. あなたに「やる気」「勇氣」を与えてくれる人を3人あげてください。
2. あなたが「高揚感」「充実感」を感じるコトは何ですか？
3. あなたが幸せを感じる「場所」は何処、「モノ」は何ですか？

‘期待’とは、ある(する)ことが実現するだろうと望みをかけて待ち受けること。

当てにして心待ちにすること。

‘信頼’とは、信じて頼りにすること。頼りになると信じていること。また、その心。

仕事において、期待に応えることは重要なこと。相手の期待に応える、それを超えていく言動を継続できたなら、きっと選ばれる存在となるだろう。しかし、真の関係性とは「期待」ではなく、「信頼」を軸にしたものではなかろうか。

期待は相手からの見返りを待ち、その結果を判断する行為。信頼はどんな結果であろうとも相手を信じ、寄り添う心。見返りや望む結果が前提となる関係にはどうしても緊張感が付きまとう。相手を信じ、寄り添う関係が生み出すのは安心感。

先が見え難い時代だからこそ「信頼」を軸に関係を築いていきたい。勇気を持って新たな一步を踏み出すために。共に助け合い、ワクワクする未来を創るために。

「期待ではなく、信頼が欲しかった」

先日、友人と食事している時に心に刺さったフレーズです。そして気づかされました。私はこれまで相手を信頼しているつもりになっていたことがいかに多かったかを。言葉では「信頼している」と伝えていたとしても、自分の心の中では（相手に対して）「こうして欲しい」「こうあって欲しい」「こう反応して欲しい」という期待を抱き、その結果に一喜一憂することが多かったように感じます。

相手に期待すること自体を否定するつもりはありませんが、信じることは次元が違うことを今更ながら実感しました。そして、これからは周囲の大切な人たちと真の「信頼」関係を築いていこう...という想いが強くなりました。自分の勝手な期待(小我)を超えて、信頼を軸にした本音の関わりをしていく—その方が楽しく、ワクワクするし、何より一步踏み出す勇気が湧いてくるはずだから。

『信頼とは信頼に値する材料があるからするというものではなく、
まず先に信頼してしまうことなのです。
信頼されると人は、自然とそれに応えようとするものです。』
— ジョセフ・マーフィー（アイルランド 宗教者・著述家）

「期待と信頼」—

あなたには「信頼」している人がいるだろうか。「信頼」関係を築けている人たちがいるだろうか。

私たちは日頃、仕事でもプライベートでも相手に「期待」していることが多い。

期待通りの人はOkで、期待外れの人はNo't Ok。—この刹那的で狭い視座を早く高めていこう。

目指したいのは、「信頼」を軸にした真の関係性。

先の見通しが立ちにくい今こそ、一歩前に踏み出すには「自分を信じる力」と「勇気」が必要だ。

その力を強くしてくれるのが、あなたと周囲をつなぐ「信頼」のエネルギー。

まずはあなたに一番近い大切な人から、一人ずつ真の「信頼」関係を育んでいこう。

＜"信頼" を育むための3つの心がけ＞

1. 自分の経験や考え、価値観を無理に押し付けない
2. 想定外の反応や結果が表れても、まずは事情を受けとめる
3. 相手の言動の表層ではなく、奥にある「真意」に心を向ける

“益者三楽”—孔子（論語） 季子第十六の五「益者三楽、損者三楽」より。
有益な三つの楽しみ—礼楽を節せんこと、人の善を道（い）うこと、賢友多きこと。有害な三つの楽しみ—驕楽（きょうらく）、佚遊（いつゆう）、宴楽（えんらく）。

“良い楽しみには三種類ある。悪い楽しみにも三種類ある。礼節と音楽を楽しむこと、他人の長所・美点を見つけて褒めること、優れた友人を増やして交際を楽しむことは良い楽しみ。地位身分や金銭を使い傲慢に振舞うこと、日々を漫然と怠惰に暮らすこと、酒におぼれ飲み過ぎることは自分を損なう楽しみ”という意味。

“有益な楽しみ”の大切さは誰もが理解しているが、“有害な楽しみ”にも魅かれてしまうのが人間の性。だからこそ“有益な楽しみ”にフォーカスし、驕楽・佚遊・宴楽に囚われないように気をつけたい。後悔の少ない、充実した人生とするために。

年末年始は忘新年会や帰省などを通じて、日ごろからお世話になっている近しい人から、たまにしか会うことのできない人まで幅広い人たちとの交流が多くなる時期ですね。また、一年の終わりと始まりの節目でもあり、いつもより有意義な休暇にしたいという気持ちになったりもします。

せっかくなので、この一年を「益者三楽、損者三楽」の視点で振り返ってみてはいかがでしょうか。

私の一年、「益者三楽」では、「賢友多きこと」に恵まれた一年だったと感じています。新しい出逢いもたくさんあったのですが、それ以上に、既に付き合いのある友人たちとの距離が近くなって、一緒に協働する可能性がいくつか生まれました。2016年に色々と新たな動きが具体化していきそうで、ワクワクです。一方、「損者三楽」では、「佚遊」と「宴楽」に溺れてしまった日がやや多かったのが反省点です。私は毎日日記をつけているのですが、休日に「何となくダラダラしてしまった、一日家にいた」という日が結構あるのと、飲みに行く回数はやや減っているのですが、深酒をしてしまう日（反省コメントがある日）は多くなっていました。「佚遊」と「宴楽」も時には必要だと思いますが、今の状態は少し多いと感じるので、これからは修正していきます。

『次の6つの心得を守れば、礼儀正しさの習慣を身につけることができる。

1. 相手の話には熱心に耳を傾ける
2. 相手の話に口をはさまない
3. 初対面の人の名前はすぐ覚えてできるだけ使う
4. もし相手の言い分が間違っているとしても、そっけなくやりこめない
5. 自分のほうが偉いといった態度を見せない
6. 自分の考えが間違っていれば、素直にあやまる』

— デール・カーネギー（アメリカ・作家、自己啓発トレーナー）

『自分の価値観で人を責めない。一つの失敗で全て否定しない。

長所を見て短所を見ない。心を見て結果を見ない

そうすれば人は必ず集まってくる』

— 吉田松陰（幕末の長州藩士、思想家、教育者）

「益者三楽」—

慌ただしく過ぎていく日常を、少しでも充実したものにしていこう。

自身を振り返るとき、心から良かったと思える時間を増やしていこう。

“快樂”よりも“幸福”を、“目先の利益”より“ありたい姿（長期ビジョン）”を。

“言うは易く行ふは難し”だが、やはり本質的には後者を大事にしたい。

人の意思の力は弱いもの。だからこそ“有益な楽しみ”を意識して選択したい。

自分の幸福感を更に高めるために。大切に想う人たちとの関係をより良いものとするために。

<“益者三楽”に学ぶ年末年始に実施したい3つのアクション>

1. お世話になった人たちをリストアップし、全員に感謝を伝える
2. 共に働く人たちへ（彼・彼女の）長所・美点をフィードバックする
3. 尊敬できる、学べると感じる友人と食事しにいく（深酒に注意）

「共創」—共に協力して大きな価値を生み出す力。周囲と協働、共生する力。

デザインやマーケティングの領域で良く使われるこの言葉は、2004年、米ミシガン大学ビジネススクール教授、C.K.プラハラードとベンカト・ラマスワミが、共著『価値共創の未来へ-顧客と企業のCo-Creation』で提起した概念。企業が、個人が、様々なステークホルダーと協働して共に新たな価値を創造するという考え方。

複雑性とスピードが増す激動の時代、一個人(企業)だけで新たな価値を生み出すのは難しく、そしてリスクも高い。これからは“共創”がカギを握るのだ。顧客とともに、同業他社(者)とともに、異業種他社(者)と共に。これまでの慣習、自社(自分)だけの能力や可能性の枠を超え、より本質的でワクワクする価値創造をしていこう。共創の源泉、パートナーは、意外とすぐそばに存在しているはずなのだ。

あなたやあなたの所属する会社では“共創”が行われていますか？

私は独立して7年になりますが、「共同や連携」をベースの仕事はしてきましたが、「共創」というレベルの仕事にはまだ達していないと感じています。自分の強みを活かし、クライアントやパートナーの皆さまと、目の前の課題に真剣に向き合い、共に全力で対応してきたことは間違いありません。その中で、大きな成果や成長実感も共有してきました。しかし、更に革新的でワクワク感のある価値を生み出すことができる、次のステージへシフトするタイミングがきている—そう直感するのです。

この感覚を信じて、自分の中にある固定概念、制約条件を一旦リセットし、クライアントやパートナーの皆さまともう一度ゼロベースで真剣に向き合っていきます。そして、“共創”ベースの新たなチャレンジを必ずスタートさせていきます！

『優れた仕事をするためには、自分一人でやるよりも、
他人の助けを借りるほうが良いものが出来ると悟ったとき、
その人は偉大なる成長を遂げるのである。
他人と最もうまく協力できる人が最大の成功を収めることになる。』
— アンドリュー・カーネギー（アメリカ・‘鉄鋼王’と呼ばれた実業家）

『才能で試合に勝つことはできる。
だがチームワークと知性は、優勝に導くんだ。』
— マイケル・ジョーダン（アメリカ・元プロバスケットボール選手）

「共創」—

自分がやった方が早い、最後は自分で何とかするしかない…。

慌ただしい毎日の中で、いつの間にかこんな考え方が常態化し、自分を追い込んでいないだろうか。

懸命に取り組んではいるが、目先の仕事に追われ、やりがいや達成感を感じる事が殆どない…。

こんな状態に陥ってしまい、悶々とした気持ちに支配されていないだろうか。

“負のスパイラル”を断ち切り、感動ある仕事、新たな価値、圧倒的な成果を生み出す可能性。それこそが「共創」。

将来ビジョンや目的を同じくする関係者との真の協働、共生。

孤軍奮闘することからはもう卒業しよう。そして、「共創」できるパートナーを本気で探してみよう。

ワクワク感にあふれた未来を創るため、一度きりの人生を充実したものとするために。

＜“共創”を実現するために心がけたい3つのマインド＞

1. 多様な価値観や考え方を受容し共感する “オープンマインド”
2. 一般常識や経験、固定概念に囚われない “しなやかマインド”
3. 美点、強み、可能性にフォーカスする “ポジティブマインド”

「益者三友」—論語季氏「益者三友、損者三友、直きを友とし、諒（まこと）を友とし、多聞を友とす、益なるかな」より。人生を真に豊かにしてくれる友について論じた言葉。

直き友—正直で剛直な友は、あなたの誤りをストレートに指摘してくれるだろう。

諒の友—誠実な人を友とすれば、あなたも感化され自然に誠実さが身につくだろう。

多聞の友—博識な人を友とすれば、あなたが迷ったときに示唆を与えてくれるだろう。

「益者三友」の対極にあるのが「損者三友」。うわべだけの不正直な人（便辟）、誠実さのない人（善柔）、口先だけ達者な人（便佞）は友にすることなかれ、という戒め。

あなたには、人生を「愉しく、心地よく、学びある」ものにしてくれる友がいるだろうか。そして、あなた自身は友人にとって、“良き友”となれているだろうか。

私は本当に「益者三友」に恵まれてきたと心から感謝しています。皆さまはいかがですか？

たくさんの問題を抱え、追い込まれて深く悩んでいた時、親身になって話を聴いてくれ、一緒に解決策を考えてくれる友がいました。キャリア選択に迷っていた時、「あなたなら大丈夫」という勇気づけと共に何をなすべきか具体的にアドバイスしてくれる友がいました。損得や立場（地位）に関係なく、とりとめのない話で盛り上がり、心から笑い合える友がいました。私が調子に乗って行き過ぎた言動が目立った時、ズバっと私を叱ってくれ、改善すべき点を示唆してくれる友がいました。

今の私があるのは、間違いなくこの素晴らしい“友”たちの支えがあったからです。

“友”から愛情と勇気をもらってばかりの私ですが、私自身が友の人生を少しでも豊かにする存在でありたいと強く願っています。具体的に何ができるかは分かりませんが、「益者三友」にあるような、正直に、誠実に、常に学ぶ姿勢を持つ人物を目指して精進していくことで、そのような存在になれるはずだと信じています。これからも素晴らしい友と共に、喜怒哀楽を共有しつつ、切磋琢磨し、よりワクワクする未来を創っていきたいです！

『もし君が悩む友を持っているなら、
君は彼の悩みに対して安息の場所となれ。
だが、いうならば、堅い寝床、戦陣用の寝床となれ。
そうであってこそ君は彼に最も役立つものとなるだろう』

— フリードリヒ・ニーチェ（ドイツ・哲学者）

『必要なのは知識でなく思いやりである。
思いやりがなければ残るのは暴力だけだ。
心に愛を知らぬものだけが憎しみ合うのだ。
人生はもっと美しく、もっと素晴らしいはずだ』

— チャールズ・チャップリン（イギリス・映画俳優・監督、コメディアン）

「益者三友」—

より豊かで充実した人生を歩みたいのなら、心から信頼できる“真友”を持とう。
あなたが悩み、苦しんでいるとき、寄り添い、共に打開策を考えてくれる。
あなたが恐れと不安を感じているとき、勇気づけ、そっと背中を押してくれる。
あなたがよくない状態に陥りそうになったとき、率直に指摘して、あるべき道を示唆してくれる。
愉しみも苦しみも、時には怒りも同じような温度で共感してくれる。
そんな“真友”を少なくていいからつくりたい。
そのための第一歩は、あなた自身が「益者三友」となることだ。少しずつでいい。
あなたの方から働きかけよう。友との関係を、人生を、より素晴らしいものとするために。

＜“益者三友”を得るための3つの心がけ＞

1. 相手の気持ちに寄り添い、共感する（評価しない）
2. 「おかしいな」と感じるがあれば率直に伝える、質問する
3. 学びや気づきを積極的に共有する

ユーモアをプラスする

2017.9

「ユーモア(humour)」—「湿気」「体液」を意味するラテン語「フモール」に由来する中世の医学用語が語源。人の心を和ませ、思わず微笑んでしまうようなおかしみ、上品で笑いを誘うしゃれを意味する。

悩ましい問題や課題が山積し、何から手をつけるべきか途方にくれる...

顧客からのクレーム、上司からの叱責でめちゃくちゃへこむ...

新たな発想、アイデアが浮かばずに膠着状態、焦りと不安ばかりが募る...

誰もが経験するネガティブ状態。真面目に気合を入れて、全身全霊で状況の改善に取り組むのもいいけれど、そんな時こそユーモアをプラスして軽やかに臨みたい。

緊張して硬くなった身体は思うように動かない。張り詰めた雰囲気から良いアイデアは生まれにくい。ユーモアは人の気持ちを和らげ、明るい雰囲気をもたらし、自然なモチベーションを与えてくれる素晴らしいエネルギーなのだ。

皆さんはユーモアがある方ですか？周囲にユーモアあふれる友人や同僚がいらっしゃるでしょうか？

最近研修のファシリテーションをしていて特に感じるのが「ユーモア」の大切さです。私が担当する研修は基本的にグループワーク中心なのですが、深い議論をし、質の高いアイデアやアウトプットを生み出すグループは「笑い」「ユーモア」にあふれ、ワイワイと取り組んでいることが多いのです。

悩ましい問題の原因分析をしている時などは特に雰囲気が重く、議論が停滞することが多いのですが、「これって逆に〇〇と考えると面白くない？」「こんな奴いないでしょ！って俺か(笑)」「ありえないかもだけど、こんなんで？」といった具合に、笑いや驚きを誘うメッセージやツッコミが差し込まれることで、何でも発言OKという安心感ともっと話し合いたいという“場”が形成されるのです。

研修の場に限らず、実際の仕事の現場でも日常の生活においても「笑い」「ユーモア」があることは、充実感や達成感、そしてありたい姿の実現に大きなプラスであると感じるのです。

『もし、私にユーモアがなければ、
これほど長く苦しい戦いには耐えられなかったでしょう』

— マハトマ・ガンジー（インド・弁護士、宗教家、政治指導者）

『唯一の救いは、ユーモアのセンスだけです。
これは呼吸を続ける限りなくさないようにしよう』

— アルベルト・アインシュタイン（ドイツ・理論物理学者、発明家）

「ユーモアをプラスする」 —

苦しみや悲しみに打ちひしがれているとき、少しの笑いに救われることがある。
思い悩み、張り詰めていた心が、何気ない一言や仕草でほぐれて楽になることがある。
ユーモアは明るさと勇気を引きだしてくれる素敵なエネルギー。

“よし、やるか！”という気持ちが自然と沸いてくる不思議なチカラ。

目の前に立ちはだかる苦しみも、いずれあなたを彩る“面白ネタ”になるはずだ。

人生にユーモアをプラスして、笑い合いながら、共に歩みを進めよう。

笑顔と和やかな心は、周囲だけでなく、あなた自身の心も明るく、温かくする。

その先には、充実感にあふれた素晴らしい未来が創られていくだろう。

＜“ユーモア”をプラスするための3つの心がけ＞

1. 「正しいこと」よりも「楽しいこと、ワクワクすること」を大切に
2. “ミス”や“ドジ”は隠さずネタとしてオープンに
3. 物事を色々な角度から見て、感じて、話すようにする

「切磋琢磨」—学問、技芸、道徳などをみがき上げることのたとえ。また、志を同じくする仲間同士が励まし合い、競い合って向上することを意味する。中国最古の詩篇「詩経」の“切するが如く磋するが如く、琢するが如く磨するが如く”が語源。

切磋の「切」は骨や象牙を切ること、「磋」はそれらを磨くこと。

琢磨の「琢」は玉や石を打ち叩くこと、「磨」は磨くこと。

素材・素質は磨かれることでその輝きを増す。一人で己を磨くことも大切なことではあるけれど、人やコトとの関わり、相互研鑽の中で磨かれる体験もまた素晴らしい。

私たちが成長実感を得られたり、自己革新を成し得た体験を思い出せば、それは素晴らしい人やコトとのめぐり逢い、切磋琢磨の経験が多いのではないだろうか。

自己研鑽と切磋琢磨の両輪で、より深みと輝きの増した自分に会いに行こう。

皆さんには切磋琢磨できる友人はいるでしょうか？最近、どんな切磋琢磨がありましたか？

2017年11月1日の日本経済新聞の一面に「瀬戸際の技術立国」という見出しの記事が掲載されました。基礎研究力・応用開発力・稼ぐ力・陳代謝力の4つの視点で10年前と今の状態を他の先進諸国と比較したデータが載っており、日本は全ての項目の成長率が最下位というものでした。記事のデータはオリジナルの為、鵜呑みにはできないものの、肌感覚でもグローバルにおける日本の技術力や革新性は相対的に低下していることは間違いないと感じます。そして、この状況の原因の一つは、今回のテーマである「切磋琢磨」の機会、質の減少にあるではないかと思うのです。

内向きなモノの見方や考え方、そこそこで問題なしという現状維持志向、低い次元での中途半端なワーク・ライフバランス、感動やワクワク感の減少...これではどんなに素晴らしい潜在能力があっても磨かれず、個人の成長も、より良い未来を創ることも難しくなってしまいます。（私自身もそうなのですが）いつの間にやら現状満足、自分で勝手に自分の限界を決めてしまう...とならないよう、意識して他者との相互研鑽や異なる体験の機会を創っていきましょう！

『どんな賢人でも、その人ひとりの知恵には限りがあって、
だから自分の知恵、才覚だけで事を運べば、考えがかたくなになる。
視野が狭くなる』

— 松下幸之助（日本・実業家、現Panasonic創業者）

『好奇心に目覚め、経験を積み、感覚を磨いていけばいくほど、それまで
知らなかった事柄と直面するようになる。
心を開いて未知のものに向き合うことが、
秘められたあなたの創造力を解き放つ最も効果的なやり方だ』

— マイケル・ゲルブ（アメリカ・作家、能力開発研究者）

「切磋琢磨」—

人は誰しも素晴らしい能力、素質を必ず持っている。

それを見つけ、磨いていくことこそ、私たちが求める成長のありたい姿。

自分の内面と向き合い、一人でコツコツと研鑽し続けることは本当に素晴らしい。

しかし、時には他者と協働や競争する、異なる環境に飛び込み未知の体験をする、
そんな“切磋琢磨する機会”からの学びや気づき、成長も大切にしたい。

好敵手（ライバル）の存在は、仕事の質やスピードを一人の時より高めてくれる。

異なる価値観や考え方との交わりは、あなたの強みを際立たせ、新しいアイデアを導いてくれる。

切磋琢磨の経験は、あなたが想像する以上の成長と成果をもたらしてくれるだろう。

＜“切磋琢磨”による成長を加速させる3つのポイント＞

1. 素直に学ぶ心と姿勢を育む（フィードバックは素直に受けとめる）
2. 自己研鑽を欠かさず、相手にも何かを提供できる自分になる
3. 感じたこと、気づきや学びはオープンに共有する

「報恩謝徳」―受けた恩義や徳に対して感謝の気持ちを持ち、自分のできる限りのことをしよう、報いようとする気持ちや言動のこと。

「報恩」は受けた愛、恩に報いること、お返しをすること。

「謝徳」は受けた愛、恩に対して感謝の気持ちを表すこと。

当たり前なことだが、私たちは自分一人の力で生きているのではない。家族や友人、共に働く人たちに支えられ、大自然の恵みの中で生かされている。

喜びや驚き、充実感や達成感、気づきと成長―その多くは自分一人ではなく、他者との関わり、大自然とのふれあい、先達たちが残してくれた知見から得られるものだ。

しかしながら私たちは、その支えを当たり前のこととして軽んじてはいないだろうか。

感謝の気持ちで受けとめ、適切な心と言動を返すことができているだろうか。いま一度自分の立ち居振る舞いを見直してみよう。

皆さんが今一番感謝の気持ちを伝えたい人はだれ(何に対して)ですか？

最近、仕事でもプライベートでも“着実に望む成果を得られている方”や“将来に可能性を感じて、前向きに行動している方”“今を充実して過ごしている方”にお会いすると、「感謝の心と言動がとても強い」という共通点があることを強く意識させられる機会が多くありました。会話の中で何度も「本当に感謝しています...」「おかげ様で...」「素敵な縁に恵まれ...」「お世話になって...」といったフレーズが出てくるのです。勿論その方々は、相手に言葉で感謝の気持ちを伝えるだけでなく、行動でもその気持ちを返しておりましたが、そのやり方も自分が無理して何かするのではなく、自然と自分の為にも相手の為にもなる“Win-Winな恩返し”をしているのが印象的でした。

いつも感謝の気持ちをもって行動し、素直に真摯に共生する―「言うは易く行うは難し」ですが、少しずつでも歩みを進め、素敵な「縁」と可能性を広げて参りましょう！

『この世における人と人とのつながりを、もうすこし大事にしてみたい。
もうすこしありがたく考えたい。不平や不満で心を暗くする前に、
縁のあったことを謙虚に喜びあい、その喜びの心で、誠意と熱意をもっ
て、おたがいのつながりをさらに強めてゆきたい。そこから、暗黒をも光
明に変えるぐらいの、力強い働きが生まれてくるであろう』

— 松下幸之助（日本・実業家、現Panasonic創業者）

『感謝は人の心を開き、運命を開く』

— 本田 健（日本・作家、小説家）

「報恩謝徳」—

あなたが心から感謝の気持ちを伝えたのはいつ、誰に（何に対して）だろうか？
大自然も、人間も、この世界は「関わり」であり、「支え合い（愛情）」で成り立っ
ている。

そして「私」という存在は、代々紡がれた命の連鎖、「奇跡」の連続体なのだ。
慌ただしく過ぎゆく毎日の中で、その「関わり」「奇跡」への感謝が薄れてしまっ
てはいまいか。

便利で心地よい生活が、自分の中で「当たりまえのこと」になってしまっ
てはいないか。心に向けて見つめ直してみよう。大自然や人との「関わり」を、
受けてきた「愛情」を。感謝の気持ちを伝え、言動で返そう。それはより良
い「縁」を育み、次の「奇跡」につながっていく。

まずはあなたの周りから、少しずつでいい。はじめていこう。

＜“報恩謝徳”を習慣にするための3つの心がけ＞

1. 自分の考えや尺度だけで物事を視ない、判断しない
2. 相手のためにも、自分ためにもなる選択や決断を意識する
3. 毎日、「してもらったこと」に心に向けてみる

「我逢人」—“我、人と逢うなり”とも読む禅の言葉。人と逢うことから全てが始まる。

人と人との出逢いの尊さを三文字で表した言葉。

意図するしないに関わらず、人との出逢いは何かを生みだし、何かが始まる。

違った価値観、世界観との出会いが自分自身を大きく成長させてくれる。

一人で抱えていた悩みや問題がまたたく間に解決に向かうことも多い。

そんな人との出逢いは、「新しい自分」との出逢いでもある。

一方、「人との別れ」もまた避けられない。一時は寂しさを感じるかもしれないが、互いの未来のために大切な選択であることが多い。むしろ新しい関係のはじまりだ。

人と逢おうという心と行動を大切にしたい。人に逢える場に感謝したい。

ワクワクする彩り豊かな人生とするために、輝きの増ました自分になるために。

最近心を揺さぶられた「出逢い」や「別れ」はありましたか？新しい気づきや発見はありましたか？

本当に私は人との出逢いに恵まれていると感じます。これまでの人生において「大きな選択、岐路」には必ず人との関わり、出逢いがありました。ホテル業界からコンサルティング業界へ道を変える意思決定は、ある人から「職業人生における目的とビジョン」について迫られたことがきっかけでした。コンサルティング業界に転職して間もなく、ついていくことができずに鬱状態になり、辞めようとする自分を救ってくれたのは尊敬する上司の深い優しさでした。アクティブプラスの立上げと独立を決意させてくれたのは、深く信頼する友人の温かい勇気づけでした。そして今、独立して8年目を迎えることが出来ているのは、これまでのご縁に加え、新しいたくさんの出逢いがあり、そこから様々な学びや気づき、チャレンジの機会をいただけているからに他なりません。だからこそ、これからもずっと「人との出逢い」を大切に、感謝して、学び続けていきます！

『人と人とのつながりには、実は人間のいわゆる個人的な意思や希望を越えた、一つの深い縁の力が働いているのである。そうとすれば、お互いにこの世における人と人とのつながりを、もうすこし大事にしてみたい。もうすこし有り難く考えたい。不平や不満で心を暗くする前に、縁のあったことを謙虚に喜びあい、その喜びの心で、誠意と熱意をもって、おたがいのつながりをさらに強めてゆきたい。そこから、暗黒を光明に変えるぐらいの、力強い働きが生まれてくるであろう。』

— 松下幸之助（日本・実業家、現Panasonic創業者）

『人間は一生のうち 逢うべき人には必ず逢える。しかも一瞬早過ぎず、一瞬遅すぎない時に。』

— 森信三（日本・哲学者、教育者）

「我逢人」—

人との出逢いは自分を、そして人生を変える力がある。
私たちは自分一人で生きているわけではない。
他者とのつながりの中で生かされている。
人との出逢いからたくさんの学び、気づき、可能性を得ることができる。
一人で抱え込み、悩んでいるのは勿体無い。億劫がらず、格好つけず、素直な心で、さあ、人に逢いにいこう。新しい道と更に輝きを増した自分を見つけにいこう。

<人との出逢いからの学びを大きくするための3つのポイント>

1. ゼロベースの心持ちで、まずは相手の話を傾聴する
2. 異なる意見や価値観こそ、深く味わってみる（内観する）
3. 不明なこと、疑問があれば必ず質問をする

氣が利く人になる

2018.10

「氣が利く」—細かなところまで注意が及ぶこと、よく心がゆき届くこと。粹(粋)である、洒落ているという意味。

「氣」ではなく「氣」。“米”は末広がりて八方に広がることを意味し、エネルギーが全身から放出されている状態。“メ”はエネルギーが抑え込まれている状態。

ちょっとした「氣づかい」が人の心を暖かくし、チームの雰囲気好転することがある。

何気ない「心くばり」が感動レベルの仕事を生み出すことがある。

大きなチャレンジや変化、斬新なアイデアを追求するのも良いけれど、まずは自分や周囲の「氣」を感じ、小さくても心温まる何かを実行してみよう。偉大な成果は、そんな「氣の利いた言動」の積み重ねから生まれるのではないだろうか。

皆さんは、「氣が利く」方でしょうか？

私はホテル業界出身ということもあり、「氣が利く力」は鍛えられていてもいいはずなのですが、実際は苦手です。特に自分に近い親しい人に対しては甘えもあつてか、心ない対応をしてしまつて不快な想いにさせてしまうことも少なくありません。よくやってしまうのは、自分目線で良かれと思つてしたことが相手にとってはどうでもいい、むしろ迷惑だったというパターンです。「過剰品質・サービス」もこのような考え方から生まれるのかもしれない。

相手や周囲を素直な心でよく観察し、「良い加減」での心くばりができるようになりたいものです。

そんな人たちがどんどん増えていけば、真に働きやすく生産的な職場が実現すると思うのです。

『目上とか目下という言葉に囚われずに、あらゆる人のことを「ばかにしちゃだめだ」と、根っから思っている人のすることは、いい感じです。

逆に、「敬意」の対象を限定していて、
多くの人を「こんなやつ」と思っている人のことは、
嫌な感じというふうに思えるのではないのでしょうか。』

—糸井重里（日本／コピーライター、タレント、作詞家）

『愛は行動なのよ。言葉だけではだめなの。
言葉だけですんだことなど一度だってなかったわ。
私たちには生まれたときから愛する力が備わっている。
それでも筋肉と同じで、

その力は鍛えなければ衰えていってしまうの…。』

—オードリー・ヘップバーン（イギリス・女優）

「氣の利く人になる」—

「ありがとう、助かりました」という言葉をかけられること、かけることは多いだろうか。思わず笑みがこぼれてしまう、心がホッとする対応に最近出会っただろうか。

“氣が利く”言動って素晴らしい。ちょっとしたことなのに心が明るく、前向きになれる。そんな言動にあふれた職場は、きっと働きやすく、効率も高いはずだ。

自分のことで精一杯、個人主義が蔓延する現代だからこそ、「氣転、心くばり」は輝く。周囲とより良い関係性を築き、充実した毎日を過ごすために、あなた自身からはじめていこう。

＜“氣が利く人”になるための3つのスタートアクション＞

1. 挨拶やお礼など、プラスの声かけをたくさんする
2. 早めの行動と準備を心がけ、周囲を観察できる余裕を持つ
3. 人の話を聴くとき、質問による掘り下げ、復唱確認を心がける